

第3話 前九年の役

安倍氏の乱が起こって、源氏の勢力は更に遠く陸奥に及んだ。

平忠常の乱が鎮まってから20年後、第70代後冷泉天皇の御代に、陸奥（今の福島・宮城・岩手県）に安倍頼時の乱が起こったが、この乱でもまた源氏は功を立てて武名をあげました。安倍氏の祖先は長髓彦の兄であるといわれる。神武天皇の東征の時に、罪を赦して遠く北海の浜に放たれて以来、代々陸奥の地に住んで土民の長をしていたが、頼時の祖父の時から一層勢力が強くなり、頼時の世にはますます盛んになって、大いに領地を拓めて、その勢力は殆ど陸奥の全部にわたった。

安倍氏の叛

その頃の陸奥というのは、後に分れて磐城、岩代、陸前、陸中、及び陸奥の五カ国となった地方全体の事ですから、ずいぶん広い。安倍頼時は、陸中の国（岩手県）を本拠として、その南部の衣川に大きな屋敷を構え、方々に出城ともいふべき柵を設けて、他からの侵入に備えていた。その有様は、まるで一箇の独立国で、京都の政府などは全く眼中にないかの如くでした。納めるべき租税は納めず、国司の命令にも従わず、一方では豪華な生活をしながら、一方ではみだりに兵を諸方に出して、土地を攻め取り、人々を打ち従えて、ますます乱暴を働いていました。

勿論、これは捨てておくべき事ではなかったもので、朝廷は陸奥守藤原登任に命じて征伐させたが、都で優長に育った唯の役人などに、どうして荒くれた陸奥の野武士に勝てる筈があるろうか。官軍はさんざんに撃ち破られて、登任はひそかに京都に逃げ帰りました。

源頼義が陸奥へ下る

そこで朝廷では、ちょうど其の時、相模の国（神奈川県）から国司の任期が満ちて上京していた源頼義を、陸奥守兼鎮守府将軍に任じて安倍頼時を征伐させた。頼義は頼信の子です。20年前に、父に従って忠常を討ち、早く既に武名を天下に馳せていました。

彼は長子の八幡太郎義家と共に、頼時追討の勅を奉じて、途々軍勢を催しながら陸奥へ下った。頼時はこれを聞くと頼義の威名は既に久しく聞き伝えて知っていたので、大いに恐れて、俄かに謹慎して命を待っていたが、其の折から、たまたま大赦があったのを機会として、頼義に降参を申し出た。それで頼義の任期の四年間は、何事もなくよく治まっていた。

安倍貞任が乱暴を働く

そうこうするうちに、源頼義はいよいよ国司の任が終わったので、もう一度管内を巡視してから京都へ帰ることにしようと、胆沢——陸中国胆沢郡（岩手県南部）宇佐村——の鎮守府のほうから、多賀——今の仙台市の北方——の国府のほうへまわった。その時、安倍頼時は厚く国守の一行を歓待して、その地の名産である駿馬や黄金を献じ、頼義の部下の者にもそれぞれ土産物を贈ったりして、心から敬意を

第3話 前九年の役

あらわ 表していました。ところが、一夜、一行が阿栗川の畔に野営した時、頼時の子の安倍貞任が、頼義の
けらい けらい みつさだ えい おそ にかわ けいせい ぎやくてん よりとき はんき ひるがえ
家来の藤原光貞の営を襲って乱暴を働いた事から俄かに形勢が逆転して、頼時は再び叛旗を翻すこと
になったのです。なぜまた貞任が乱暴を働いたか？ それには仔細があります。

部族偏見

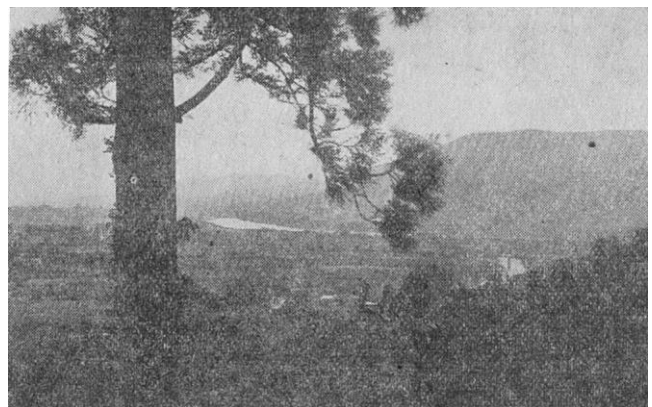
みつさだ ごんのかみ ときさだ 藤原光貞は陸奥権守藤原説貞の子で、彼に一人の美しい妹があった。この妹を、嘗て安倍貞任の妻
のぞ ときさだ ことわ にかわ いきお と きょうしゃ つ
にと望んで説貞から断られたことがあります。安倍氏がいかに勢いが強く、富んで、驕奢を尽くし
ていても、根が土族で賤しい生まれですから、京都の貴族の娘を嫁にやるわけには行かないというのがそ
の時の理由でした。かもん とうと ときさだ
家門を尊ぶ説貞のほうからいけば仕方のないことなのですが、さらでだに部族の
さべつ けいべつ う いきどお いた しんがい そうい
差別で常に軽蔑を受けて、憤りを抱いていた安倍氏のほうからいけば、心外なことであつたに相違ない。
さだとう いこん しかえ きかい ねら
貞任は深くこれを遺恨に思っ、いつかはその仕返しをしてくれようと機会を狙っていたのが、たまたま
この時に勃発したのです。

叛乱の再発

じじょう わ よりよし さだとう むほう ぼうこう いか よりとき ひきわたし もと
その事情が分かると、源頼義は安倍貞任の無法な暴行に怒って、安倍頼時にその引渡しを求めた。
ほう よ しょうぼつ ぞぞく いきどお さだとう
法に依って処罰しようとしたのです。しかし、土族の軽蔑を憤っていたのは貞任ばかりではありません
ん。よりとき むね うつぶん も いちぞくろうとう
頼時の胸にも鬱憤は燃えていた。彼は一族郎等を集めて言いました。
およ あ さいし ため さだとう ばか ふし じょう みす
「凡そ人間が世に在るのは皆妻子の為である。たとえ貞任が馬鹿であっても、父子の情として見棄
てることは出来ない。もし彼が誅せられたなら、わしはどうして生きて見ていられよう。この四年の
間、身を将軍に委ねて奉公した事を考えられたならば、少しぐらいの罪は赦してくれてもよさそうなもの
である。わが一家一門を呼び集めれば、軍勢もさして不足ではない。もし戦って負けようとも、今、
がんぜん さだとう みごろし ちじよく むし
眼前に貞任一人を見殺しにして一家の恥辱を受けるよりは、わしは寧ろみんなと共に死ぬほうがいい、
みんなはどう思うか？」

かんぶん どうい 一同の者が感奮して同意したのはいうまでも
ありません。そこで俄かに衣川の関を堅めて、
よりよし はんこう たいど と
源頼義に反抗の態度を執ったのです。

よりよし いか そ ぎ
頼義はますます怒りました。「よし其の儀な
らば、安倍頼時の一家一門、1人も残さず誅戮せ
い」とはげしい命令を下して、一気に衣川に攻め
よ
寄せました。



岩手 衣川の柵の址（遠くに白くみえるのが北上川。右方に水面白く橋脚のみえているのが衣川）

安倍頼時の二人の婿

ぐんぜい よりよし むこ つねきよ ながひら はじ そうだん
その軍勢の中に頼時の婿の藤原経清と平永衡とがいました。2人は初め相談して、「いかに親とは

第3話 前九年の役

いえ、朝廷の命令にそむいて、兵を挙げて反抗するのはよくない」と、そのまま官軍の中に加わっていたのですが、いよいよ衣川の館を攻撃しようという時になって、平永衡の身の上に妙な風説が起こった。あいつは元、前の陸奥守藤原登任の家来であったが、頼時の婿になって反いた奴だ。今度はうわべは官軍だが、実は舅の頼時に内通して、こっちの様子を知らせているらしい。その証拠には、あいつの身ごしらえを見るがいい。緋威の鎧に銀の胄で、一目で誰にも分かるような風をしている。自分の在所を敵に知らせて、射させないようにしているのだ、というのです。源頼義がよく調べてみると、どうやら事実らしいところがあったので、急に永衡を斬って軍陣の血祭りとしました。

これを見て恐れを抱いたのは藤原経清です。自分も同じ安倍頼時の婿であれば、いつ何時斬られないとも限らない。これはいかかしてはいられないぞ、足許の明るいうちに逃げてしまえと、或夜、こっそりと手勢を率いて安倍頼時の陣に走りました。

頼時側の結束

永衡が誅せられたことは、頼時側の結束を固くするに役立った。彼らは降参しても殺され、戦っても殺されるならば、同じくは一家一族枕を並べて、いさぎよく討ち死にしよう、いよいよ心を揃えて防戦に努めた。それでたびたびの合戦で、いつも官軍のほうが勢いが悪く、迎も衣川の館を陥れる見込みなどは立たちませんでした。

源頼義は頻りに心を苛ったが、既に任期も満ちている事であるし、ともかくもと一時多賀の国府に軍を班して、この趣を朝廷に奏聞しました。

この時、朝廷では後任の国司を既にそれぞれ任命したところでしたが、叛乱が再発したと聞くと、誰も辞退して任に赴こうとしません。そこで、重ねて頼義を陸奥守兼鎮守府将軍に任じて、頼時の征伐をつづけさせることにしました。ところが、ちょうど其の年から、国内が非常な飢饉で、殆ど穀物が実らなかった、兵糧が少しも集まらない。それがために諸国から来ていた軍勢も次第に散じて、つづけて衣川を攻めることが出来なくなったのです。

ところが、これに反して安倍頼時の威勢はますます加わった。多年蓄えた兵糧は有りあまるほどある上に、立て籠った城は要害で、軍勢は皆代々の家来ですから、いくらでも気長に構えていられる。今はもう何の将軍などが恐ろしかろうと、全く官軍の高を括って、いよいよ暴慢に振舞った。

金為時の説得と安倍富忠の帰順

源頼義もこれには全く困ってしまい、徒に軍議を重ねるばかりでしたが、その時、土地の郡司で金為時という者が、頼義のために大いに力を尽くして、安倍方に加担している土地の豪族一人々々に説いてまわった。頼時に従っているのは即ち朝廷に叛いており、取りも直さず朝敵であるということ、彼は諄々と説いて聞かせて大義名分を明らかにしたのです。

豪族の中には、それを聞いて初めて自分が天皇に反しているのを知って、驚いて官軍に属した者も少なくなかったが、其の中に安倍富忠という者がいました。富忠は安倍頼時の部下の中でも殊に有力

第3話 前九年の役

な者でしたから、それが官軍に身方したと聞いて今度は頼時が驚いた。「それは大変だ。早く行って
 思い返させなくてはならぬ」と、直ぐに自ら2,000の手兵を率いて富忠の許へ急いだ。ところが、富忠
 は頼時が来ると聞くと、険しい山の陰に伏兵を設けて、これを迎え撃って、予て謀しあわせておいた金
 為時らの官軍と共に、頼時の一隊を中に囲んで皆殺しにしようとしたのです。

安倍頼時の死

この不意打ちに頼時は全く度を失って、ただもう死物狂いになって戦ったが、2日目の昼過ぎに、どこから飛んで来たとも知れない流矢に中って負傷しました。それで、やっと3男宗任が居城としている鳥海の柵——今の陸中国(岩手県)江刺郡鳥海村——まで逃げて帰ったが、ついにそこで亡くなった。実に天喜5年9月5日、秋風の冷たく身に染む夕べでした。

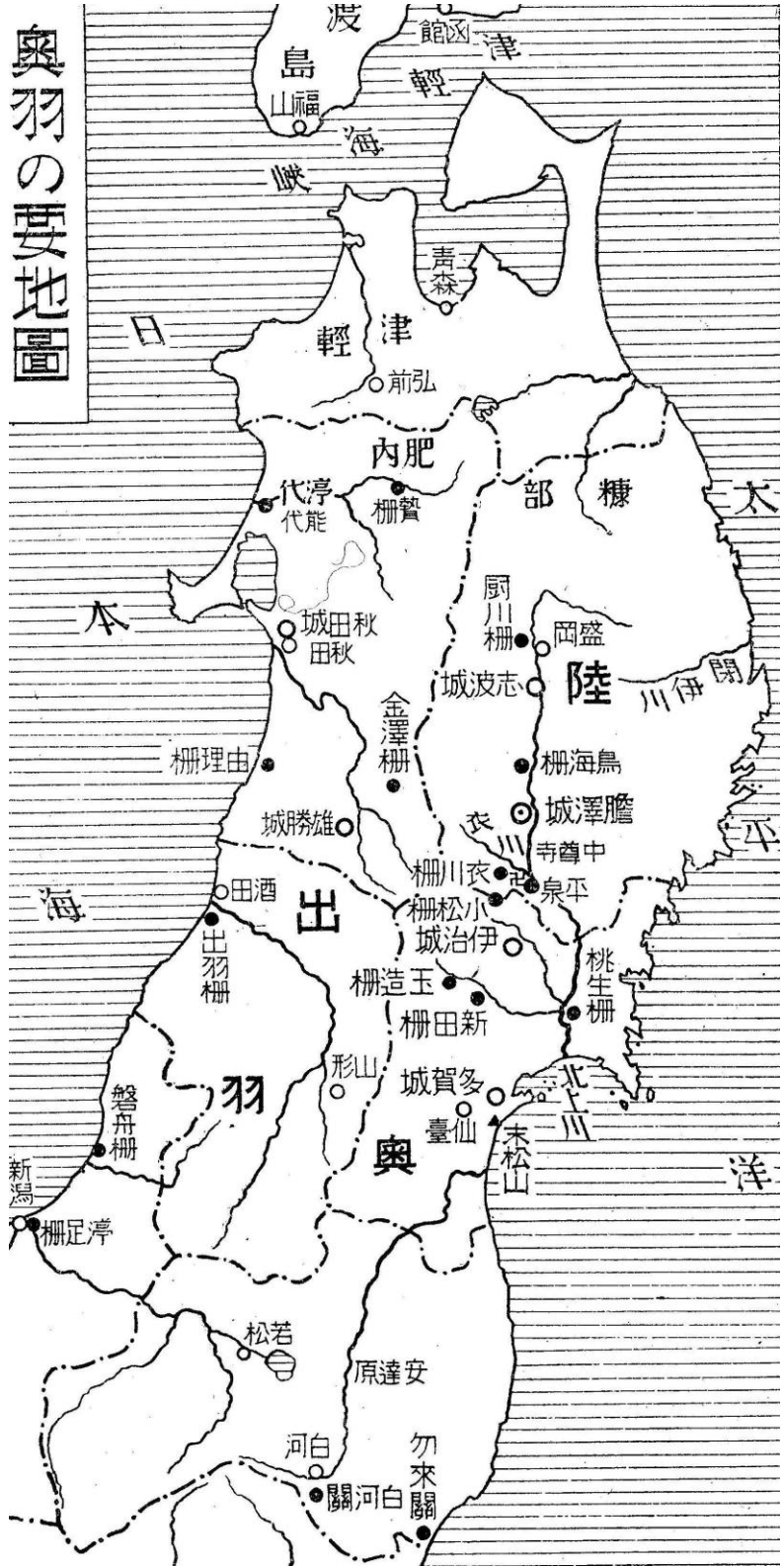
斯うして安倍頼時を漸く討ち取ったが、子の貞任は少しも屈しなかった。彼は父に代わって兵を率い、弟の宗任らと共に官軍に抵抗して、その勢いは却って以前より盛んなくらいでした。

官軍のほうでは相変わらず兵糧は欠乏している。軍勢もはかばかしく集まらないが、と言ってもいつまでも貞任らを放任しておいたのでは、折角頼時を誅したかいもない事となって、將軍の威信にもかかわるので、天喜5年11月上旬、源頼義は精兵1,800余人を率いて、一挙に賊軍を粉碎しようと鎮守府を出発しました。

貞任らの叛

これを聞いた貞任は、賊ながらも中々の豪傑だったので、攻め寄せられて来られるまでは安閑と待つてはいなかった。

われから進んで逆襲して、敵に一泡吹かせてやろうと、4,000余騎を率いて、本拠としていた河崎



第3話 前九年の役

の柵から鳥海の柵まで出て来た。その軍勢の数からいっても、官軍は半分にも足りない上に、土地の様子にも馴れていなかったの、初めから非常な苦戦でした。

それでも官軍は、昼夜4日の間は息も継がずに攻め続けて、敵に逆襲の機会を与えなかった。

官軍の苦戦

ところが、4日目の晩から俄かに烈しく寒風が吹き出して、まるで津波でもあるような大吹雪が起った。忽ち往来は止まって、官軍の兵糧は少しも運送が出来ない。

食わずには戦えないので、官軍は皆攻口を引き退いて、急いで陣屋を構えて、どうやって兵糧を輸送しようとかという評議に一兩日を送っていると、機会を狙っていた貞任は、この時、4,000余騎を七手に分けて一時に城中から打って出ました。

官軍はあわてて立って応戦したが、この一兩日は満足に飲み食いをもしていなかったの、気力の続きようがありません。

しかも、賊の兵らはその大吹雪の中をふだんと同じように自由に馬を走らせてかかって来るのです。終に官軍は総崩れとなって、源頼義親子が血なまぐさい雪の荒野で漸く落ち合った時には、主従僅かに七騎となっていましたが、勝ちに乗った賊の兵らの追窮は猶止まなかった。

源義家の奮戦

彼らはいつの間にか200余騎の賊の一隊に囲まれていた。さんざんな負け軍で疲れきっている上に、寒さは寒し、腹は空っています。進むことも退くことも出来ない絶体絶命の場合となったが、さすがは源氏の大将義家はその時漸く17才の少年でしたが、武勇人にすぐれ、殊に弓が上手だったので、八方に馬を飛ばして数多の敵を射殺し、まるで鬼人のように奮戦しました。

頼義を始め他の5人の将士もまた縦横無尽に駆けちらして戦ううちに、頼義の馬は矢に中って斃れ、ついで義家の馬も斃れたので、すなわち敵の馬を奪って乗ってまた戦って、漸く一方の血路を開いて、辛うじて敵の囲みをのがれ出ました。

斯ういう頼義らの苦戦のさまが奏聞されると、朝廷では幾度か諸国に命を下して、兵士や兵糧を陸奥へ送らせようとして見ましたが、藤原氏が政治を誤っていたために其の命令は一向に行われなかった。其上、陸奥の住民の多くは、戦争を恐れて、疾の昔に他国に逃げて行ってしまっていたので、その地では兵士を招集することも兵糧を補給することも出来ませんでした。

官軍のこの窮状を見ると、貞任の心はいよいよ驕った。彼は終に衣川の関の外まで兵を出して、人々から租税を取り立てたり、役所に納めてある品物を略奪したりしました。

頼義の苦衷

飽くまでも朝廷を蔑ろにしたこの亡状を眼前に見ながら、如何ともすることの出来ない源頼義の無念はどんなだったでしょう。何とかして征伐したいと、いかに彼が心を苦しめたかは想像に余りある。

第3話 前九年の役

けれども、朝廷の命令が行われなく、徴発に依って官軍を強くすることが出来ないとしたら、一体どうすればよいのか？ 終に頼義が思いついたのは、安倍氏に優るとも劣らない有力な豪族を手なづけて、その力を借りようという事でした。

出羽の清原氏が官軍に加わる

其のころ出羽の山北の豪族に清原光頼、同じく武則という兄弟がいた。出羽というのは今の羽前(山形県)、羽後(秋田県)の地です。兄弟共に武勇の聞こえが高く、一族も多く、安倍氏と同じように富み栄えていました。

頼義は此の兄弟の許にたびたび使いを遣って、利害を説き、順逆を教えて、朝敵誅伐の加勢を頼みました。けれども、光頼らの決心は容易につかず、曖昧な返事をしているうちに幾年か過ぎ去って、ついに康平5年7月——頼義親子が九死に一生を得た天喜5年の大苦戦から五年の後——になって、弟の武則が官軍に味方しました。

彼は兄の光頼がいつまでもぐずぐずしているのを見限って、自分だけで子弟眷属を催し、その勢一万余騎を率いて国境の山路を越え、昔、坂上田村麻呂が蝦夷を征伐した時に陣営を置いたという栗原郡の宮岡という所で、精兵3,000を率いる頼義親子の軍と合した。一つは順路でもあったのですが、一つは吉例にあやかるために、わざとそこで会合したのです。

小松柵を陥る

さて大挙して、そこから北征の途に上ったのが8月16日でしたが、その時からの官軍の勢いは、これまでとは天と地とのちがいでした。その翌々18日には、宗任と叔父の僧良照とが守っていた小松の柵——陸中国磐井郡一の関町附近——を一気に陥れ、直ちに衣川の館へと軍を進めた。ところが、その時、あいにく雨が降り続いて攻め寄せることが出来ずにいると、小松の柵で破れて逃げた宗任が、その附近の悪者共をうまくおだてて、官軍の運ぶ兵糧を方々で横取りさせた。それで、官軍は兵を分けて、それらの者を捕らえたり追い払ったりすると共に、6-7里(24-28km)離れた村に稲や粟のよく実った田畑があると聞いて、それを刈り取らせに数千の兵を遣った。

安倍貞任は衣川の柵に拠って官軍を待ち構えていたが、これを聞くと雀躍りして喜んだ。官軍は今方々に散らばっている。本陣はがら空きだ。この機に乗じて逆襲すれば頼義の首はすぐ取れる。それ急げと、13,000余騎を率いて、9月5日の夜明け前に衣川を発って押し寄せました。

驚いたのは官軍の本営に残っていた連中です。この無勢で、あの多勢をどうして防ぐことが出来る？ 士卒などは青くなって震えていた。これを見ると、清原武則はにこにこしながら頼義の前に行つて、「いよいよ御運が向いて来ました。貞任が謀を失ったので、今日は味方の大勝利です」と言った。

貞任の逆襲を破る

頼義もどうして防いだものかと考えていたところですから、不思議な事をいう武則だと思って、「ど

第3話 前九年の役

うして勝利を得られる？」と聞き返すと、武則たけのりはいよいよにこにこしながら、「わが官軍は今、兵糧ふそくが不足で困こまっているのですから、軍いくさが長引ながびいてはやりきれません。敵の城は非常に堅固けんごですから、もし貞任さだとうがその険しい要害けわを守ようがいって出て来まもなかったなら、官軍は忽たちまち疲つかれて、久ひさしく攻せめていることは出来なくなりました。然しかるに、今、貞任さだとうらは進さいわんで来くだて戦たまおうとするのです。これ天が將軍に幸さいわいを降くだし給うのではなくて何でありましょうや。身方まんざの大勝利よるこに疑いさいはありません」とはっきりと強い言葉でいった。満座まんざの者がこれを聞いて喜よりよしび勇なるほどむと、頼義よりよしも成程なるほどとうなづいた。

そこで急いで軍の用意に取りかかったが、すでに大勝利と信じた官軍の元氣は実に盛んでした。果たしてその日の合戦は、寡かを以もってよく衆しゅうに當あたり、頼義よりよしの首を取ろうとまで意気込んで来た貞任い き ごとの大軍を木端微塵こつばみじんに駈散けちらして、逃おげるあとから追おって追おって追おいかけて、とうとう衣川ころもがわの館たてにまで攻せめ寄せました。

衣川の嶮

衣川の館けんは今の平泉の北方数里(5km)のところに當あたる。さすがに安倍頼時よりときが根城ねじろとしていたところだけに、そこへ通じょうじる一こみち条の小道は険けわしく、狭せまくく、所謂一人関い わゆる かんに當あたれば万夫ばんぶも開ひらくことが出来ないという屈強くつきょうな要害ようがいで、柵外さくがいの広ひろい総堀そうほりには深ふかく衣川せきの水を堰おり入りれている。折おりからの霖雨りんうで、それが溢あふれて岸あを浮うかしていたので、鳥ならば飛とんで行こうが、人間の力ではどうしようもなかった。しかも軍勢ぐんぜい一万余騎いちまんにちで立たて籠こもっているのです。

官軍は軍勢を三手に分けて、6日の昼過ぎから烈ひるすしく攻はげめかけたが、一歩も進せむことの出来ないうちに日が暮くれた。清原武則たけのりは馬から下りて、独ひとりこっそり堀際ほりぎわまで忍しのび寄よって、淡あわい夕月へんの光でその辺の様子を見ていたが、やがて本陣ほんじんへ帰かえると、家来けらいの沼太郎ぬまのたろう久清ひさきよを呼はりて謀はかりごとを授さづけた。

川の兩岸まに曲まがりくねった大木しげがあつて、その枝が両方から茂あり合おもって水おおの面おもを覆おおっている。月が入くって暗くらくなれば敵に見咎みとがめられる虞おそれはないから、あの枝から枝を伝わたわって向ぞくう岸じんやへ渡わたり、賊の陣屋へ火をつけよ。敵てきがその騒さわぎぎで狼ろうばい狽はつぼうしているところを八方はつぼうから攻せめ上のぼれば、必かならずこの館は破なれるにちがいにというのです。

久清ひさきよは元来がんらいその身が軽さく、まるで猿さるか栗鼠りすかのように樹上じゅじょうを渡わたり歩あるくのが得意とくいでしたので、その夜の十時頃に、自分おとに劣ゆうしらぬ勇士つ30余人きしちかを連しれて岸よ近くえだに忍ことび寄しげり、枝葉むこうきしの殊とに茂うったところを選んで、すらすらとこちらの岸の大木の梢たいぼくにこずえのぼって、ひらりと向むこうきしう岸の大木の梢とに飛うび移うつりました。そしてその木を半ば伝なかい下つたったところくだで、太ふとい確たしかな枝えだに、用意ふじなわして行はしった長いい藤繩いの端はしを結いつつけると、こちらの木の岸の根きしに結ねいつけた。藤繩ふじなわの釣橋つりはしができたのです。下みにはひたひたと漲みなぎり落おちた水が黒く光あっている。30余人の者共じゅんじゅんは、順つりばし々さに一人づつその釣橋さにぶら下くもがって、まるで蜘蛛たぐのように手繰りながら向こうの岸へと越まった。全いく命いのち懸がけの軽業かるわざでした。

敵の陣屋に近づいて見ると、そこは貞任さだとうの片腕かたうでとも頼たのむ大藤内業近おおとうない なりちかという者の柵なりちかでしたが、業近なりちかを始め兵士らは皆本陣へ集みなまっており、残さいしっているのは妻おんな子なごもと婢ひさきよ共やすやすだけだったので、久清しらは安々と忍ひび

第3話 前九年の役

い とき すうかしよ かわかぜ いっそうはげ ふ ほのお ふ と
入って、一時に数箇所に火をつけたのです。 その折から川風が一層烈しく吹いて、炎を八方へ吹き飛ばすと、火は忽ち陣屋々々へと燃え移りました。

さだとう うらぎ もの ちが
貞任を始め、これには全く驚いて、「さては城中に裏切り者がいて火をつけたに違いない」と、ただ徒にあわて騒いで右に左に駆けまわりました。 ひさきよ は わか
久清らの30余人はなおもここかしこに馳せ別れて、煙の中をうろろうしている賊兵らを追い立てて切りまわる。 城 中 の混乱がいよいよ甚だしくなつたのを見ると、待ちに待った寄せ手の官軍は三方から一時にどつと関を作つて攻め入りました。 賊軍は既に全くうろたえきつているので、ただ逃げまわるばかりでした。 さだとう ふせ
貞任兄弟も今は防ぎようがなくなつて、うらもん む に だ
裏門からこっそりと脱け出ると、ちりぢりになつて逃げ出した。

安倍貞任と源義家

これよりも先、よしいえ さわ いそ に みち う と
義家は城中の騒ぎのさまを見て、急いで逃げ路にまわつて、落ちて行く敵を討ち留めようと待つていた。 ま くら やみよ さだとう
真つ暗な闇夜のことですから、貞任はそれとも知らずに馬を飛ばして逃げていく。よしいえ さだとう
義家は貞任だと気がつくと、おのれ貞任、逃がすものかと、すぐ あと につが お
直ぐに後から弓に矢を番えたまま追いかけたが、さだとう ゆうもう に
貞任は日ごろの勇猛にも似ず、あとを見ずに逃げて行く。

「やあやあ貞任」とよしいえ さだとう
義家は声をあげた。 「敵にうしろを見せるとは卑怯千万！ しばら かえ
暫く返せ、言うことがある！」

それがよしいえ わ さだとう とて のが き
義家だと分かると、貞任も、今は迎も遁れることは出来まいと覚悟を極めて、静かに馬をとどめた。 その時、よしいえ

「ころも ほころ
衣のたては綻びにけり」

うた しも よ ころもがわ たて やぶ さだとう はな ふ
と歌の下の句を詠みかけた。 衣川の館の破れたのにたとえたのです。 貞任は馬の鼻を引き返して振り向きながら、すぐに、

「とし へ いと みだれ くる
年を経し糸の乱れの苦しさに」

と上の句をつけた。 彼もまた着物に縁のある言葉を使つて、幾年も攻め立てられた苦しさにという意味を詠み返したのです。

すると、よしいえ つが や はづ さだとう のが
義家は何とおもつたのか、番つた矢を外して引き返したので、貞任は危ないところを免れて遥かに落ち延びました。

義家のなさけ

ふ しぎ おも よしいえ
不思議に思わずにいられなかつたのは義家の家来共です。 かほどに大事な敵を手に入れながら、なんでも無事に逃がしてやつたのか？ わけ たづ よしいえ
その訊を尋ねると、義家は、「この幾年かの間、義家の矢に向つて生きて還つた者は一人もいない。 さだとう
貞任もこれはよく知つていように、彼なればこそ敵に言葉をかけられると、引き返して、今のように答えたのである。 かくも事の急な場合に、死を前にしながら、誰かよく貞任のように詠み返す者があろうぞ。 ぞく じんぶつ やさ
賊ながらあつばれな人物だ。 その優いしい心をも感じないで、一矢で射殺すのは情けを知らぬというものである。 に
逃げる時には逃がしておいても、やがて運の盡きるの

第3話 前九年の役

も間がないから、その時に討ち取ればよい」と答えたということでもあります。

助けてやった義家もえらいが、義家を感じさせた貞任もえらい。昔からわが国では文武の両道に達していなければ真の武士とはいわれなかったが、実際、こういう情味のある話を聞くと、誰でも心ははれられとして朗らかな気持ちにするではありませんか。われわれが常に斉しく重んじている武士道の現われであるからです。

さて衣川の館を破った官軍は、すこしの猶予も置かずに、その翌8日には大麻生野の柵、瀬原の柵を攻め落として、11日に鳥海の柵に迫った。この柵は、前にもいったように宗任の居城で、この時は藤原経清と共に守っていたが、官軍の勢いが盛んなのを見ると、なまじ此処で防いで敗北を重ねるよりは、いっそ厨川の城まで引き退いて、貞任と力を協せて戦ったほうが良いと、取る物も取りあえず逃げて行った。

厨川の城

厨川の城は貞任の本拠です。今の盛岡市の西北一里ばかりのところに在り、東と南は北上川と雫石川が高い断崖の下を流れ、西と北とは深い大きな沢が幾つも連なりめぐっている。上には柵を結び、厚い練塀を高く塗って、櫓を設け、河と柵の間には空壕を掘って、底には刃物を倒さまに植えている。其上、安倍氏としてもここが最後の守りであるから、貞任を始め決死の覚悟で元気をつけている。

源頼義は途々馳せ集まった軍勢を合わせて、将卒すべて30,000余騎、9月15日の夕方に厨川に到着したが、この城の要害堅固な有様を見ると、すぐには攻め寄せることも出来なかったのも、その夜は守り明かそうと城を前に望んだところに陣を張った。

すると、城中の賊兵共は高い櫓にのぼって、口々に大声で、「折角大軍を率いて押し寄せながら、どうなされた？籠城している兵はこの近辺の者共で、いうにも足りない小勢ですぞ。それをすら、恐れられたのか？天下の武将頼義將軍ともあろうものが、追討使として下って来られたかいもなく、何年も攻めあぐんでおられるとはお気の毒だ。いつまで生きていられるよりも、早く攻め寄せて、われわれが武勇の程をご覧になって冥途の土産になさるが良い」と、扉を開いた手を高くあげて、「寄せろ寄せろ」と磨いた。そればかりではない、なおも寄手をからかってくれようと、数十人もの美しい女を櫓にあげて、歌を歌わせ、舞を舞わせた。

頼義は大いに怒って、夜の明けるのを待って攻めかからせたが、傷つく者は身方ばかりで、敵は少しもひるむ様子がない。新手を入れ替え入れ替え戦って、日も暮れ、夜も明け、17日の昼過ぎまでも攻め続けさせたが、もとより無双の要害だけに、ついに城中に攻め込む隙が無かった。却って官軍に何百人もの死者が出た。

焼き討ち

頼義はつくづくと考えた。この城はこのように攻めていたら、兵を損ずるばかりで攻め破ることは出来そうにない。急に焼き討ちにしてくれようと。そこで士卒に命じて、附近の人家をこわして壕を埋め、其の上に枯れ草を山のように積み上げさせた。そして自分は馬から下り胃を脱ぎ、遙かに皇城

第3話 前九年の役

の空を拝して、つつしんで石清水八幡宮に風を祈って後、自ら火をおこして御神火と称し、これを積んで置いた枯れ草の上に投げた。

その時、どこからともなく白鳩が2羽飛んで来て、官軍の陣の上を翔けめぐったが、やがて城の表口の高檜の上にとまると見ると、不思議や、忽ち大風が吹き起こって、枯れ草の山は炎々と燃え上がった。寄手は喜んで関の声をあげる。城兵は驚いて騒ぎ立つ。見る見るうちに焰は吹き募る風に随って高く並んだ檜々に燃えついた。濛々と煙が渦を巻く。

城兵は備えを乱して逃げまどう。その機に乗じて烈しく官軍が攻め込んだので、敵はひとたまりもなく総崩れとなって、川へ飛び込んで溺れる者もあれば煙に巻かれて死ぬ者もある、射殺される者もあれば切り伏せられる者もある。かの藤原経清もこの時城の表口を固めていたが、捕らえられて殺された。

貞任誅される

安倍貞任は最後まで焼け残った陣屋で軍の様子を見ていたが、ついに、今はこれまでと覚悟を極め、最後の一线を華々しくしようと、精兵30余騎を率いて柵の外まで打って出た。

あわよくば将軍頼義に近づいて、刺し違えて死のうとしたのであるが、賊中第一の大丈夫の決死の働きも忠勇な官軍の働きには敵しなかった。彼は終に大勢のために鉾を以って刺し倒されて、擒となりました。

貞任は今年34才、身の丈は6尺5寸(195cm)、腰のまわりは7尺4寸(2m22cm)という大男でしたから、やっと大きな楯に載せて、6人で担いで頼義の前に運んだ。頼義は彼を見据えて、朝廷のご恩に背いた数々の罪を責めたが、貞任は重傷を負っていたので、物を言うことも出来ずに遂に首を斬られた。弟の宗任は水底を潜って一旦逃げのびたが、後に出でてきて降参して、義家の家来となりました。

地方の豪族の勢力

かくして安倍氏の乱が全く平らいだのは、実に康平5年(1062年)9月17日の事で、清原武則が官軍の身方となって北征の途に上ってから僅かに一ヶ月の後でありました。これを見ても、いかに清原氏の功が大きかったかということが分かりますと共に、将軍頼義の武威を以ってしてなお征服することの出来なかった安倍氏といい、苦もなくこれを滅ばした清原氏といい、北方の豪族がいかに大きくなっていくことも分かります。

安倍頼時が再び叛いた時からこの時まで9ヵ年を経ているので、世にこの乱を前九年の役といっています。前と言うのは後の後三年の役に対しての称です。

戦乱の間こそ九年でしたが、頼義らが都を出てからは12年でした。この長い年月の頼義の苦心はそもいかに多かったでしょう！黒かった髪も白くなり、体も痩せ衰えてしまったと伝えられています。けれども、この間に源氏の勢力が深く関東から陸奥にかけて根を下ろしたこともまた明らかです。

頼義と、義家らは次の年の2月に京都へ凱旋して、朝廷から厚くその功を称せられた。頼義は正

第3話 前九年の役

いのげ よしいえ じゅ いのげ にん きよはらたけのり よりよし そうせい よ
四位下伊予守に、義家は従五位下出羽守に任ぜられ、清原武則は、特に頼義の奏請に依って、従五位上
じよ
に叙し、鎮守府將軍として奥羽2州の鎮撫を仰せ付けられました。

よりよし お しんおん しゃ はちまんぐう た つる おかはちまんぐう
後、頼義はこの戦いに於ける神恩を謝して、鎌倉に八幡宮を建てました。これが今の鶴が岡八幡宮
お
の起こりであります。

(第3話 ぜん 前九年の役 えき 終わり。 次は前頁に戻り、 第4話 ご 後三年の役 えき へ)